

2009年9月14日(月) 10:00-11:00

講演(2)「“希望の地球”ビジョン」

竹村 真一 文化人類学者・京都造形芸術大学 教授

地球は、光合成生物の酸素の生成を起点とし、生物が作り、生物が環境を改造し続けてきた。そして今まさに人類が新たな地球を作ろうとしており、その過程で資源制約、人口問題、気候変動など多くの課題に直面している。石油燃料の枯渇は目前に迫っており、低炭素・脱化石燃料社会を今後10年でデザインしていかなければならない。人口についても、現在その約半数が都市に集中しており、今や都市そのものが人類最大のリスクとも言える状況だ。少子高齢化も進み、例えば日本では2050年には高齢者が約40%になるなど未曾有の人口構成になる。東京首都圏においてはわずか5年後に高齢者人口が1100万人を超えるとされている。これらの危機をどう受け止め、むしろ機会として今後の展開を図るかは、人類にとって重要な課題である。

現在の地球がどういう状態にあるかを、宇宙からの視点でリアルタイムに可視化するのが、「触れる地球」である。この地球儀は、これからリスクに直面していく子供たちにリアルに状況を理解してもらうことも意図して開発した(日照状況、雲画像、大気汚染物質の排出状況などを提示)。これを見ると、台風が日本を逸れてよかった、というようなことではなく、その台風が他の国・地域に被害をもたらしていることがわかるなど、地球全体を大きなシステムとして認識することができる。実際、世界の国々は一蓮托生であり、例えばどの国で排出した汚染物質も一国の汚染に留まらず地球全体に波及する。環境問題については、何事においても、国境を超えたグローバルガバナンスが重要であることがわかる。

地球温暖化の問題は深刻である。地球が一様に温暖化していくのではなく、北極、シベリア、ヒマラヤやチベットなどにおいて特に温度上昇が激しい。北極海等の氷の融解による海面上昇が、太平洋地域のみならず東京、ロンドン、上海など大都市を含む水害リスクを高めることや、あるいはメキシコ湾流への影響でヨーロッパや中近東の寒冷化を招くことも予測される。ヒマラヤ、チベットでの氷河の融解も加速しており、アマゾン、インドネシアにおける森林消失も深刻な状況で、温暖化影響によるグローバルレベルでの水資源、食糧危機が現実化しつつある。

こうした中、地球に対する全体的視野を持っているということは大きな希望となると

私は考える。デジタル地球儀のような地球のモニタリングシステムが世界の政治・経済界のリーダーたちに共有され、政治・経済の重要な意思決定に反映されるようになれば、かつて気候変動をきっかけに人類が農耕という新たな文化を手にしたように、大きなイノベーションが可能になるかもしれない。事実、風力発電、太陽光発電等を始めとする代替エネルギーの活用は、海洋温度差発電他の新技術の開発も含め目覚ましく進展しており、それらを適切に活用することは、地球のために、将来を担う子供たちのためにも、今後ますます重要な活動となると思われる。
